

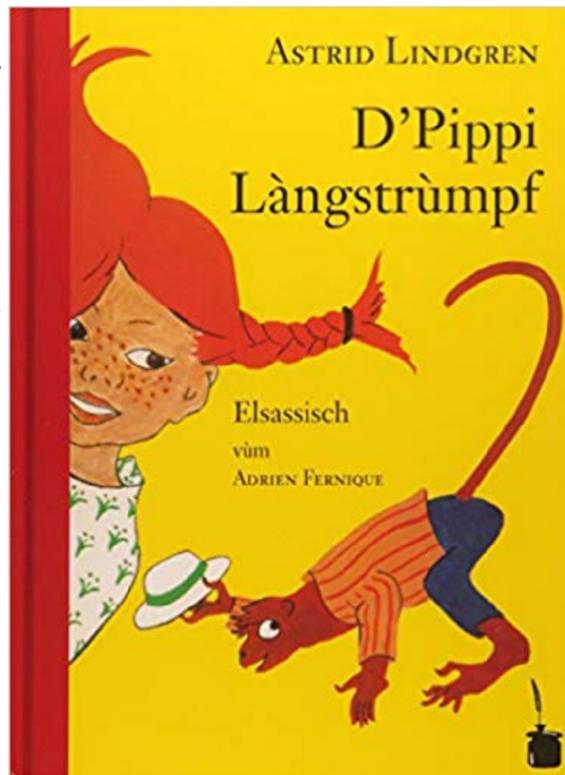
田舎育ちのダンス好きな少女は幼い母になり、 世界一つよい女の子を産んだ

眞鍋由比 2020年2月

『長くつ下のピッピ 世界一つよい女の子』小1の頃、あまりに好きで担任の先生に無理やり読み聞かせを迫ったことがあります。そのピッピの展覧会をいま、**神戸ファッション美術館で3月29日まで**やっています。**高校生以下無料**ですから、ぜひ！写真OKなスポットが4箇所あります。ミュージアムショップも充実していました。

リンドグレーンは子どものころ遊び死にするほど楽しくてしょうがなかったけれど、10代になって、成績はよかったけど、わりとやんちゃで周囲から浮いて見られるのがつらくてたまらなかった。

そして地元新聞の編集者に見込まれ、記者・秘書見習いをしていて、18歳のときに子どもを身ごもってしまう。閉鎖的な田舎町では未婚の母なんて許されるはずもなく、デンマークで産んで里親に託してストックホルムで仕事をしながら毎週息子に会いに行っていたそうです。そのときの罪悪感から、児童文学への強い気持ちを育んだとのことでした。（映画ではこのあたりのことを描いていました。シネリーブル神戸で「リンドグレーン」公開中です。映画の半券を展覧会に持っていったら割引してくれます）



そしてストックホルムで出会ったリンドグレーンと結婚して、息子ラーシュの7つ年下の娘カーリンが生まれます。この子が寝物語に「長くつ下のピッピのお話を聞かせて」と名前を指定して、お母さんがつむぎだしたのが『長くつ下のピッピ』。彼女のためにタイプして絵まで描いたお手製のピッピの本が展覧会で飾られています。

『リンドグレーンの戦争日記1939-1945』岩波書店2017 ロシアに占領されるくらいなら、「ハイルヒトラー」と言ったほうがマシ！というほどロシアのフィンランド侵攻のほうがスウェーデンにはドイツの攻撃よりも脅威だった。第二次世界大戦時の生活に沿った記録。生活のことも事細かに書かれている。戦争になったらコーヒーの配給が遅く、バターはフランスなんか月に200グラムしか手に入らないけれど、スウェーデンは直接戦争に参加していないから、配給になっていた。手帳何冊にも亘る記録は、まだ『長くつ下のピッピ』を出版する前のもの。戦時中に秘密の手紙検閲部署に就職していたので、アストリッドはかなり新聞やラジオの言わない、現実の情報を知っていた。ヨーロッパ側の第二次世界大戦の詳細が理解できます。夫のリンドグレーンは連れ子を引き取った寛容な人ただただでなく、結構な大物だったのね。



『ピッピの生みの親 アストリッド・リンドグレーン』三瓶恵子著 岩波書店1999 アストリッドが生まれたのはイケアが生まれた町でもありました。自分で組み立てて安く済ませる家具なんてと嘲笑されていたイケアも今では世界を駆け巡る大企業。児童文学作品を発表するだけでなく社会問題にも巧みな寓話を用いて意見を新聞に載せるようになります。

みなさんは、わたしと同じく、どの時代やどの状況においても人的要因が破局や大事故のもとになったということに気付いているでしょうか？そして、世界が存在しつづげるかぎり、それが続くということも。そして、それは他の場合だったらべつに構わないことなのかもしれませんが、原子力発電に関しては駄目なのです。たえず人々が注意深くあり続け、大事故を避けるための細心の厳しい安全対策を取ることができると思いますか？わたしたちが日々その軽率さを目にする人的要因を本当に取りのぞくことは可能なのでしょうか？^{88p}

展覧会場のビデオで一部見ることのできるドイツで行われた平和賞受賞スピーチも載っています。リンドグレーンの二つのテーマパークの比較や、子ども専門の病院を建てるための尽力など、子どもの物語を作っているだけではない、すごい人。スウェーデンでお札になっているのもわかります。